始めてみよう！！りんどう栽培（詳細版）
～定植初年の管理～

りんどうは夏秋期に清涼感を感じさせる花として需要が高く，また，仏花としてお盆，秋のお彼岸に特に需要があります。宿根草であり一度定植すると４～５年栽培できますが，定植１年目は株養成期間で，切り花は２年目からです。品種の組み合わせで長期間にわたって出荷でき，労力も比較的少ない品目です。

りんどうは定植初年と定植２年目以降で管理方法が変わってきます。今回は定植初年の管理方法について紹介していきます。

(1) 定植準備

定植前年の秋に植物性の完熟たい肥３ｔ/10ａを全層施用し，土壌酸度をpH5.0～5.5 に矯正しておきます。畑地や乾田では定植１か月前までに土壌消毒を行い，ガス抜きしておきましょう。畝幅 140～150cm （通路 50cm），高さ 20～30cm の高畝とし，乾燥防止，地温上昇抑制，雑草抑制のため白面を表にして，白黒ダブルマルチを張ります。

(2) 定植

まずは定植する苗の準備です。苗は種子から育苗して準備することもできますが，通常は購入します。近年の市販品種は種苗登録されているものが多く，採種や繁殖は禁止されています。

苗の準備ができたらいよいよ定植です。定植適期は本葉３対展開以降で，５月下旬～６月上旬までに定植してください。栽植密度は条間 45cm，株間 15cm の２条植えとします。定植時には目安として畝の中央に 15cm 角４目のフラワーネットをべた張りし，両端２列のネット角に合わせてマルチに直径６～８cm 程度の穴を開け，セル苗をやや深目に植えます。根が乾かないように丁寧に定植し，速やかにかん水を行って苗の活着を図ってください。

(3) 施肥

肥料による根痛みを起こし易いため，有機質主体の緩効性肥料やコート肥料を用います。酸性土壌を好むため，アルカリ肥料は使用せず，石灰を施す場合は pH を上げない資材（硫酸カルシウム等）を利用してください。また，定植

から１か月は吸肥力が弱いため，かん水を兼ねて 1000 倍の液肥を 10 日に１回程度施用します。

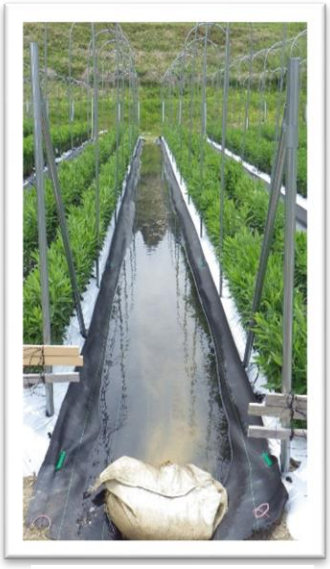
（10ａあたり）

成分	総量	基肥	追肥	摘要
	kg	Kg	Kg	
Ｎ（チッソ）	17	15	2	完熟たい肥
P_2O_5（リン酸）	17	15	2	を３ｔ施用
K_2O（カリ）	17	15	2	する

(4) かん水

定植株の根が十分広がるまでは，株元が乾かないよう定期的にかん水してください（過湿にならない程度）。特に定植１年目の生育期に土壌水分が不足すると２年目以降の生育が劣ってしまうので，乾き具合を見ながら適期を逃さないようにかん水を行ってください。

根が十分広がったら，夏季には畝間が白く乾かない程度に畝間かん水します。高温下での長時間の滞水は根傷みの原因となるため，畝間かん水は気温の低い時間帯に行い，できるだけ短時間に終わらせましょう。



畝間かん水の様子

(5) 支柱・ネット張り

高さ1.8mの支柱（もしくはアーチパイプ）を２m間隔で設置し，15cm角４目のフラワーネットを張ります。ネットは定植１年目は１段でもよいのですが，２年目以降は３段に張り，生育に応じて引き上げてください。ネット目を合わせるためには，１年目に３段一度に張る方が合わせやすくなります。

(6) 除草

雑草は早めに手取り除草しましょう。大きくなった雑草はりんどうの株を痛めないよう株の地際を手で押さえながら抜くか，ハサミを使って地際で切り取るなどしてください。

(7) 遮光

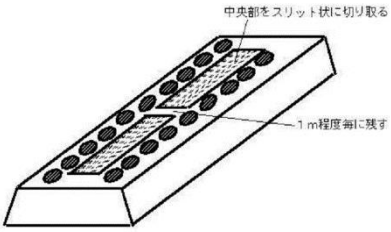
植物体及び地表面の乾燥防止と地温上昇抑制を目的として，定植直後から 30～50％遮光資材やべたがけ用不織布でのトンネル遮光を行います。遮光は８月下旬まで行ってください。

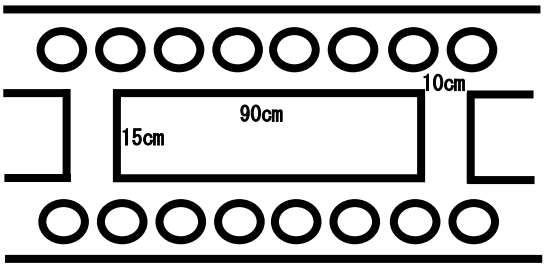
遮光の様子

(8) 越冬管理

自然に茎葉が枯れるまで防除を行い，株の充実を図りましょう。茎葉が枯れたら茎を刈り取ります。図のようにビニルマルチの中央部分を 15cm×90cm 程度に切り取って施肥穴を設置し，その施肥穴に 12 月末までに基肥を施してください。施肥穴間は 10cm 程度残す様にしてください。株元が大きく露出している場合や越冬芽が高い位置から出ている場合は，凍害を防ぐために，たい肥等で覆いましょう。

また，寒さよけと春先の保温を目的として敷きわらを行い，風で飛ばないようにフラワーネットで押さえます。





図：マルチの切り方

越冬管理を行った畝の様子

始めてみよう！！りんどう栽培（詳細版）

～定植２年目以降の管理～

りんどうは夏秋期に清涼感を感じさせる花として需要が高く，また，仏花としてお盆，秋のお彼岸に特に需要があります。宿根草であり一度定植すると４～５年栽培できますが，定植１年目は株養成期間で，切り花は２年目からです。品種の組み合わせで長期間にわたって出荷でき，労力も比較的少ない品目です。

りんどうは定植初年と定植２年目以降で管理方法が変わってきます。今回は定植２年目以降の管理方法について紹介していきます。

(1) 施肥

基肥は前年の株整理時か春の萌芽前に施用します。追肥は，開花時期により施肥時期が異なりますが，一般的に開花の約 90 日前に花肥，生育中期のつなぎ肥，切り花終了後の礼肥等があります。

（10ａあたり）

成分	総量	基肥	追肥	摘要
	kg	Kg	Kg	
N（チッソ）	15	10	5	追肥は，花肥，礼肥，つなぎ肥等
P_2O_5（リン酸）	15	10	5	
K_2O（カリ）	15	10	5	

(2) かん水

５日以上降雨がない場合は，畝内の土壌水分を確認して，かん水を行ってください。畝間かん水ができるほ場では数時間水を溜めるようにするのが理想的ですが，停滞水には絶対しないでください。

畝間かん水の様子

(3) 間引き

定植２年目以降には萌芽数が多くなり，密生による光線不足と通風不良で切り花品質が低下するとともに病害が発生しやすくなります。このため，草丈が30cm 頃までに弱小茎を中心に折り取り，最終的には，１株８本程度に間引き，１㎡当たり 60～70 本程度にしてください。

(4) 病害虫防除

りんどうの病害虫について代表的なものとその防除方法を紹介します。

ア　葉枯病

葉の黄褐色不整形病斑で、５月以降の多湿条件下で下葉から発生します。前年度の被害葉の残渣が一次伝染源となります。展葉後から定期的に薬剤散布をして予防してください。

葉枯病の症状が出た葉

イ　褐斑病

葉の灰褐色病斑で，初期は星状で灰白色。７月中旬頃に下葉から発生し，８月上中旬に蔓延します。進行が早く，切り花品質が低下します。梅雨期を中心に薬剤を予防散布してください。

褐斑病の症状が出た葉

ウ　灰色かび病

葉先枯れを起こした生長点や下位葉，花弁に６月以降，恒常的に発生します。降雨が続くと発生しやすく，薬剤による防除を行います。

灰色かび病の症状が出た葉

エ　白絹病

　りんどうの葉が黄化し，しおれ，株元に白い菌糸や茶色の菌核が発生します。放置すると隣接した株に伝染し，次々と枯死してしまいます。発見したら薬剤を発病株と周辺に施用し，マルチ資材や周辺土壌もほ場外に持ち出すようにしてください。

白絹病感染株の株元の様子

オ　リンドウホソハマキ

　幼虫が生長点や葉の付け根から茎内に食入し，髄部を食害します。５～９月に３回程度発生します。切り花後も防除を行い，密度の低下に努めます。被害茎で越冬するため，発見したら刈り取って焼却します。

リンドウホソハマキの成虫

カ　ハチ類

　開花期にハチ類が吸蜜のために花に潜り込み，花弁基部に穴を開け，授粉によって花弁の老化変色が進みます。防虫ネットにより侵入を防ぎます。

りんどうの花で吸蜜するハチ

キ　オオタバコガ

７月以降，収穫間際の花に食入します。花の着色期以降に定期的に薬剤散布を行ってください。

(5) 収穫

収穫適期は頂花房の大部分のつぼみが着色したときで，収穫の際は刃物は使わず折り取ってください。収穫の際は次年度の株養成のためにできるだけ切り下株の茎を長く残すようにしてください。また，草丈が低く切り下が残らない早生系品種は，１株に３本程度収穫せずに，残すほうが良いです。朝夕の涼しい時間帯に収穫し，茎葉が濡れている場合は陰干しをしてから水揚げを行いましょう。

(6) 切り花後の株管理・越冬方法

次年度の株養成のため，切り花後も引き続き病害虫防除を徹底し，寒さで茎葉が枯れるまで健全葉を残します。その他は，定植１年目の越冬管理と同様とします。

越冬管理を行った畝の様子